



この記事URL : <https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00933/061400042/>

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。
著作権は日経BP、またはその情報提供者に帰属します。
掲載している情報は、記事執筆時点のものであります。

川又Dが行く！建築デジカツ最前線

連載をフォロー

「マーターポート」の用途拡大、施設休館や3密回避、無観客で3Dウォークスルーが急伸

川又 英紀 日経クロステック／日経アーキテクチュア

2020.06.19

建物の空間全体を丸ごと撮影し、3D（3次元）で記録・保存できる赤外線スキャンカメラ「マーターポート（Matterport）」の利用例を、前回のデジタル活用（デジカツ）で詳しく紹介した。建築家の前川國男の自邸である「新・前川國男邸」の「360度&シークエンス（連続）」の3Dモデルは、建築関係者なら見ておいて損はない（<https://archihatch.com/archibank/924>）。



建築家の前川國男の自邸である「新・前川國男邸」をマターポートで撮影した3D空間。部屋を横からのぞき込んだような「ドールハウス」ビューと呼ばれる立体表現で見たときの様子（資料：ARCHI HATCH）
[画像のクリックで拡大表示]

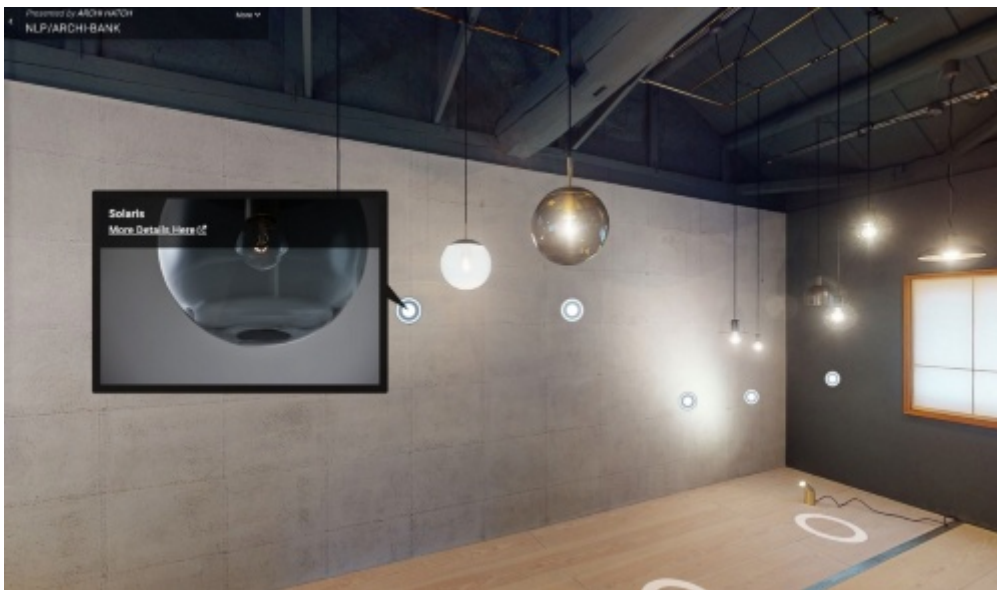
関連記事：[コロナ禍で大注目の3Dカメラ「マターポート」、新・前川國男邸の立体画像を撮影](#)

緊急事態宣言中だった2020年5月13日、新・前川國男邸を含む建築空間のオンライン体験サービス「ARCHI HATCH（アーキハッチ）」が始まった。新・前川國男邸にマターポートを持ち込んで撮影し、コンピューター上に生成した3D空間内を移動しながら、360度閲覧できる。赤外線で寸法も同時に測定しているの、縮尺も正確だ。

これは「3Dウオークスルー」と呼ばれる体験である。4Kで撮影するマターポートの画質は鮮やかで、細かいところまで建築を堪能できる。

ARCHI HATCH（東京都世田谷区）を立ち上げたのは、CEO（最高経営責任者）の徳永雄太氏である。東京・品川にある「建築倉庫ミュージアム」の元館長だ。建築業界の人脈を生かし、アーカイブ制作に奔走している。

有名建築家の建物や歴史的建造物だけでなく、一般の建物も積極的に撮影し、ARCHI HATCHの使い道を提案している。例えば、3Dウオークスルーで建物の中を「散策」しながら、気になった家具や照明など建材をクリックすると説明が出てきて、そのまま購入サイトに飛べるようにする試みである。



建物内の照明をクリックすると、どのメーカーの製品かが分かり、設備選びの参考にしたり、購入できたりする（資料：ARCHI HATCH）
[画像のクリックで拡大表示]

これを応用すると、無店舗のネット通販サイトに3Dウォークスルーを導入することが考えられる。一時的に商品や飾りを撮影可能な場所に並べてマターポートで撮影し、店舗が打ち出したい世界観を紹介する。商品に近づいて見て、気に入れば、購入ページに飛べるようにする。青空市場やフリーマーケットのような、一時的な路面販売にも適用できそうだ。

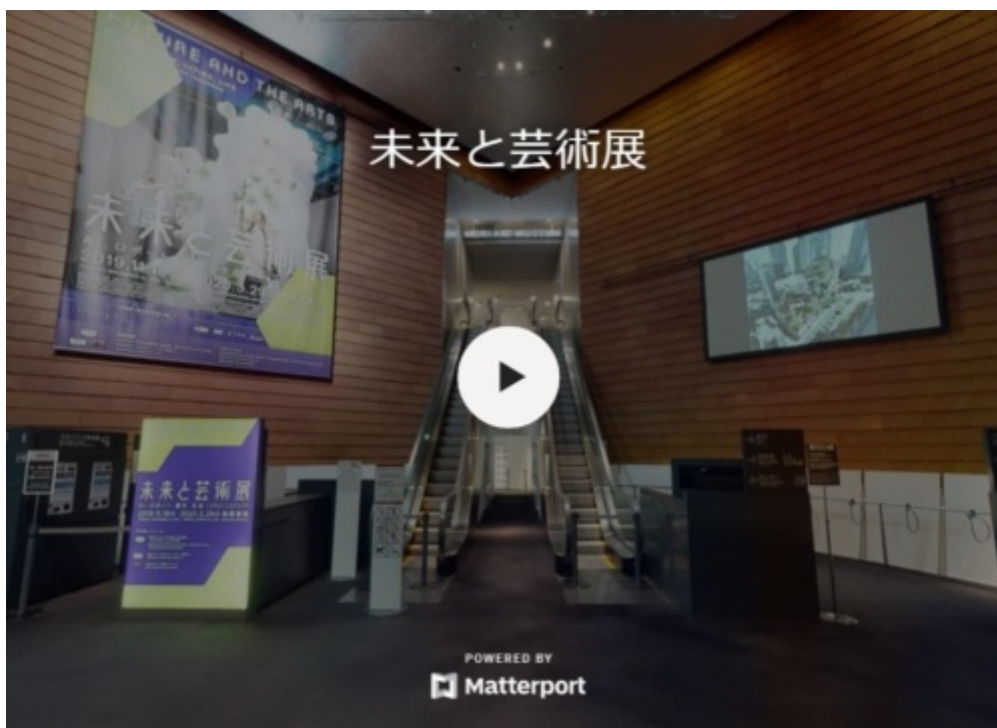
なお、マターポートの仕様や使い方は、私の体験記を参照してほしい。

関連記事：[3D赤外線スキャンカメラで建物を丸ごと記録、取材先の会議室を撮影してみた](#)

会期中で終了した展覧会や新作個展をオンライン公開

3Dウォークスルーはオンラインが日常生活に深く食い込んできた今、大きな可能性を秘めたものになっている。コロナ禍にいち早く飛び付いたのが、アート界である。

緊急事態宣言を受けて一時休館を決めた美術館が3Dウォークスルーで展示物を公開するという、新たな動きが出てきた。先陣を切って話題になったのが、六本木ヒルズにある森美術館の展覧会「未来と芸術展」の3Dウォークスルーである。



六本木ヒルズにある森美術館の展覧会「未来と芸術展」が、4月末に3Dウォークスルーで限定公開された（資料：森美術館）
[画像のクリックで拡大表示]

未来と芸術展は新型コロナウイルスの感染拡大防止により森美術館が休館になったため、会期の途中で終了してしまいました。しかし、休館中に会場をマターポートで撮影。展覧会を企画した南條史生氏（森美術館特別顧問、前館長）の動画解説まで付けて、4月28日にオンライン公開した（<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamdigital/03/>）。

6月30日まで、誰でも3Dウォークスルーを体験できる。企画と制作はARTLOGUE（アートログ、大阪市）、撮影と技術協力はexAgent（京都府向日市）が担当した。

未来と芸術展は、展示の大きなスペースを「未来の建築」に割いている。現物を見逃した建築関係者は、3Dウォークスルーを見ておいたほうがいい。

緊急事態宣言が解除された5月末以降も、3Dウォークスルーはアート界に広がり続けている。新型コロナの問題は長期化が確実なので、外出自粛要請が解けた6月に始まった展覧会では初めから、オンライン公開をセットで用意しているものが出てきた。

6月12日に渋谷PARCO内の「PARCO MUSEUM TOKYO（パルコミュージアムトーキョー）」で始まった、写真家の蜷川実花氏の個展「東京 TOKYO／MIKA NINAGAWA」は、会場展示と3Dウォークスルーの併催が目玉になっている（<https://art.parco.jp/museumtokyo/detail/?id=410>）。

同29日までの会期中、オンラインは無料で鑑賞できる。展示はただで見せて、写真集やグッズのネット販売につなげるという、コロナ禍でのアートビジネスの試金石になりそうな企画だ。



写真家である蛭川実花氏の個展「東京 TOKYO／MIKA NINAGAWA」は、会場展示と3Dウォークスルーを併催。会場構成は、Atelier Tsuyoshi Tane Architectsが担当した（資料：パルコ）

[画像のクリックで拡大表示]

会場構成は、建築家の田根剛氏が率いるAtelier Tsuyoshi Tane Architectsが担当しており、建築関係者にもお勧めである。こちらのオンライン展示も撮影機材はマターポートで、Psychic VR Lab.（東京都新宿区）が技術提供した。



3Dウォークスルー（3Dビュー）の入り口（資料：パルコ）

[画像のクリックで拡大表示]

「無観客」前提で緊急企画した展覧会が登場

一方、ARCHI HATCHの徳永氏は、建築の3Dウォークスルー制作で培った経験を、緊急事態宣言中だからこそ求められる企画に生かそうと、無観客のアート展覧会の開催に走り出した。



ARCHI HATCHの徳永氏は緊急事態宣言中に「無観客」のアート展覧会を提案し、アーティストと共に3Dウォークスルーを急ぎょ制作して5月24日に公開した。一時的な展示という条件を生かし、設営場所の制約を受けやすい巨大な作品を並べた（写真：ARCHI HATCH）
[画像のクリックで拡大表示]

森美術館の展覧会や渋谷PARCOでの個展のオンライン公開とは異なり、徳永氏が目指したのは最初から「無観客展示」を前提にした3Dウォークスルー制作である。鑑賞者には外出自粛を促し、濃厚接触を避け、リアルでの展示物は公開しない。というか、撮影が終われば、作品は撤去してしまう。



会場や作品をマターポートで撮影している徳永氏。手前の黒い機器がマターポート（写真：ARCHI HATCH）

[画像のクリックで拡大表示]

一時的に使える広い場所さえあれば、開催できるメリットがある。アーティストが現地で滞在制作する場合も、1人で黙々と作業する。これなら作り手も密にならずに済む。

この展覧会「ソノアイダ#COVID-19」は作品鑑賞もさることながら、会期を20年5月24日からコロナ禍が収束するまでの「その間（ソノアイダ）」に設定したことに大きな意味がある。アーティストらしい問題提起を、社会に向けて押し出したものだ（<https://sonoaida.jp/>）。

アフターコロナやポストコロナといった言葉が早くも飛び交い始めているなか、コロナの収束を「どんな状態になったときと考えるか」「新しい時代に移行するまでの『間』を注視しよう」と投げかけている。参加アーティストの1人である藤元明氏は、こう説明する。



展覧会「ソノアイダ#COVID-19」の3Dウォークスルー（資料：ARCHI HATCH）

[画像のクリックで拡大表示]

藤元氏は「五輪後の東京を真剣に考えよう」と声を上げたアーティストであり、「2021」というプロジェクトの発案者だ。東京五輪の延期が決まる半年以上前の19年9月14日から10月20日まで、東京・京橋にある戸田建設の本社ビル1階で「TOKYO 2021」という展覧会を開催した。

関連記事：[地震後30分の犠牲者行動データ、「TOKYO 2021」の大画面で実名入り展示](#)

2021は当初、東京五輪の翌年を意味する象徴的な数字として、アイコンに使っていた。21年は「東日本大震災からちょうど10年」という節目の年に当たる。

まさか、東京五輪が21年夏の開催予定に延期されるとは、誰も想像していなかった数年前に始まった活動である。コロナ禍が収束に向かうまでのその間に、延期された東京五輪の開催が計画されているとも考えられる。

五輪が無事に開催されたとき、ソノアイダ#COVID-19の3Dウォークスルー展示は終了しているのだろうか。見守っていきたい。公開が終わっても、アーカイブとして画像はずっと手元に残っているのも、3Dウォークスルーを制作しておくメリットだ。



Copyright © Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.